

なのだ。裸一貫から出発し、いろいろ苦勞して得た収穫物を、一挙にむしり取られ、精神的、肉体的苦勞が、死を早めたのだ。

台湾引揚者

長野県 小林 きく美

私は昭和十一年八月、紹介され、単身渡台して、台南州知事官邸で、藤田知事の家庭の仕事に従事しておりました。十二年四月頃、台北州知事に栄転と共に、私も台北州知事官邸につとめ、もっぱら総督府の関係、官邸に、又軍司令官官邸への連絡など、外来客への応対にあたった。

すでに支那事変が起こり、兵隊さんたちの官邸宿泊も二回ほどありました。その間、知事も痔の手術や盲腸手術もされたので、奥様が渡台、十三年秋頃、それと入れかわりに私は東京の藤田家のお子さんのお世話に目黒区の家に戻りました。(十一月頃)翌十四年三月、

知事は退官となりましたが、就任予定の会社が未完成のため、九月頃まで東京ですごされました。

その間、私は六月五日、郷里の父の死にあい、かけた時には、父は目を落としていました。不幸を詫びるのみでした。涙隠して、同年九月頃、又藤田さんが会社役員就任と共に、再渡台して東門町四条通に住。

第二次世界大戦が始まり、藤田さんは防衛団長、会社役員、社長として活躍されました。私は部落の人びとと防空頭巾、モンペ姿、空襲が激しくなると、煙幕がわりにガジュマルの枝葉を燃やしながら空襲警報に、急ぎ防空壕に逃げこんだこともあり。終戦まで、その間、爆撃を逃れるため、立派な住宅街を強制的に軍部でこわしたので、小さい家に移住しました。

さて終戦となつての人心の動揺、内地とは生死も首信も不明。台湾には中国本土の役員、軍人がきて、安藤軍司令官逮捕。自殺した人のことも耳に入りました。藤田さんも多少目をつけられるかと心配しました。会社の工具等は押しかけるし、そのうえ、中国からの役

人らしい人が通訳を連れて訪れたので、藤田さんは不在、不明の一点ばかりで追いかえました。数回後、用件を聞かせて欲しいといったところ、会社や防衛団の財産を全部渡して欲しいとの要件で、中国本土からきた接收員であったと知りました。「藤田さんが帰宅されたらお伝えしておきます。数日後、改めてお越しください。」と応対し、ほっとしました。

数日後に、会社に於て、接收・引継ぎの会合がありました。そのうえ、しばらく台湾に残留して、いろいろと教えてくれとのこと、英語なら先方と話も通じる東大出身の藤田さん。さまざまの苦勞もありました。工員も、旧社長も一律に二千円の月給といえます。

一般の人は、昭和二十一年三月頃引揚げが始まったのに、私は藤田さんと共に残留組、半年後には引揚げました。その準備に、家財は台湾の人に与えたり、街頭売りを会社の部下の人に実行を依頼しました。行李一個とふとん一包みと千円以外は不可、検問がきびしいとのこと、一般引揚者はまじめだ。ところが、軍人の上層部の者は、われ先にたいせつな物は飛行機で日

本内地に運び、家族も早く日本に逃げ、引揚げは終わっていました。

引揚げには、藤田さんが引揚団長としての役目を果たされたのです。名前もローマ字綴り、母親のいない他人の子供を私は背負って、昭和二十一年十二月二十日すぎ、基隆港に集合、大和丸捕鯨船に乗船の時は、台湾人が見送りにきてくれたことがせめてもの心の安らぎでした。

船は佐世保港に入港、赤痢病の疑いが出たので、海上で二週間隔離され、お正月は海の中で潮風にさらされ、きび飯の食事でした。上陸したのは、一月六日頃、港から引揚收容所までの山の登り降りは大変でした。特に他人の子供を背負つての身、やっとの思いで收容所に着きました。收容所に約十日間、その間水は時間給水。一月十五日頃、実家にたどり着きました。

身障者次兄と姉の食客同様の一年間をすごしました。私の帰国を心待っていた母は、二十一年六月二十七日に永眠していました。ほんとうに私は両親に対しても親不孝のみで、仏壇に向かって涙で詫びた次第です。